

## 芝生と図書館

山内政樹

(1999年度 B, 2001年度 M, 2004年度 D)

関西学院大学文学部英文学科で4年間を過ごし、大学院で5年間、さらに研究員として約5年間を過ごした。ふりかえると人生の多くの時間を関西学院で過ごしたことになる。15年近くあった学生時代の多くの時間を、私は上ヶ原キャンパスにある芝生と図書館で過ごした。

昔見た海外ドラマの影響なのか、大学には芝生があるものという刷り込みが幼い頃よりあり、上ヶ原キャンパスの中央芝生に惹かれて入学した。英文科を選んだ理由は、単純に英語の成績が良かっただけで、然したる目的があったわけではない。中学・高校を通して文学作品はおろか、本を読むという習慣が全くなかった。そんなわけで教室で過ごすより大学生活の多くを芝生の上で過ごすことになった。芝生で遊んだり、友人と話したり、本を読んだり、ぼーっとしたり、タバコを吸ったり（当時は喫煙可）など、思い返せば決して褒められた学生ではなかった。何となく2年間を過ごし、ゼミに配属されると少し意識が変わった（ような気がした）。ゼミで文学作品に英語で直接触れる機会が増えると、その魅力を少しずつではあるが、理解できるようになった。ただ、文学作品そのものより、作品を論じた評論文の面白さに目が向くようになった。これは現在でも変わらない。

卒論を終え、無事大学院に入学したが、何をすればいいのか、どう研究すればいいのか皆目見当がつかず、しばらくの間、身動きが取れない状態にあった。大学時代の友人の多くが就職し、友人との会話にずれを感じるようになって、大学院入学を後悔しながら、またもや芝生の上でぼーっとする時間が増えた。ただ2年間という短い時間の中で何かをしなければならぬという思いは常にあった。大学院の授業では、多くの先生方が「とにかく英語

---

を読みなさい」という話をされているのを何度も耳にして、その言葉に従うことにした。それからは芝生ではなく、図書館で多くの時間を過ごすことになる。大学院の5年間で、できるだけ多くの文献を読むことに集中し、薄暗い図書館の地下で多くの時間を過ごすことになった。図書館地下の雑誌がある書庫に通っては、**Thomas Hardy** を論じている論文や『パンチ』などの19世紀に出版されていた雑誌の記事をコピーしては読み、またコピーしては読みを繰り返して行った。一般企業の事務職員よりコピーをした記憶があるし、コピーをしているのか、文献を読んでいるのかさえこんがらがるほど、図書館にこもっていた。

思い返してみると関西学院大学英文科で過ごした多くの時間は、本との対話であり、自分自身との対話であったように思う。考えの合わない本、何を言っているのかわからない本、読後に感動を覚える本など、さまざまな言葉を通して自己形成を行なった貴重な時間であったと思う。**Robert Scholes** が「読むという行為は自分自身を読む（知る）」という行為である」と書いていたが、私にとっても同様であり、またそれ以上かもしれない。本を通して入ってくる言葉や思想、思考が私の中で蓄積され、消化（昇華）され、新たな自己を形成していく糧となる。また、本だけではなく、英文科の先生方との飲み会も貴重な自己形成の機会であった。飲み会の席ではあるが、そこでの先生や仲間との何気ない会話に感動したり、危機感を抱いたり、反省したりと、多くの言葉を聞かせていただいた。酒を浴びるほど飲む、という言葉があるが、酒の弱い私にとっては、言葉を浴びるほど聞く、という表現が関西学院での飲み会ではふさわしかったように思う。現在は、千葉工業大学で研究・教育に励んでいるが、学生時代に感じることもなかった働くことの大変さや研究のむずかしさ、奥深さを痛感している。今度は関西学院で学んだ多くの言葉を、今の学生に少しでも伝えられればと考える次第である。

最後に、関西学院大学英米文学英語学専修（旧英文学科）創設80周年、誠におめでとうございます。今後とも更なる発展・躍進をお祈り申し上げます。